

糊をこぼしたような花卉の椿

三月末ころになると二月堂の前の開山堂に糊こぼしと呼ばれる椿の花が咲きます。「糊こぼし」は、花卉に糊をこぼしたような白い色がまじる椿です。別名老弁（ろうべん）椿とも呼ばれます。老弁というのは、東大寺の前身の金鐘山寺（こんしゅじ）の住職で東大寺初代別当老弁上人のことです。開山堂にはその老弁の彫像が安置されています。開山堂は一定の日しか開門しないのでいつも入ることはできませんが、三月の終わり頃には、開山堂の扉越しに見える場所がしつらえてあります。最近では糊こぼしも少し樹勢に元気がなくて残念です。白毫寺の樹齢四〇〇年の「五色椿」、伝香寺の「散り椿」とともに「奈良三名椿」のひとつ。三月上旬から四月上旬に咲きます。白毫寺の椿は境内の古木に五色の椿が咲きます。伝香寺の「散り椿」は花卉が首から落ちないで一枚ずつ散るのでその散り方が武士に好まれ「武士（ものもの）椿」とも呼ばれます。



東大寺三月堂の糊こぼし

二月堂のお水取り



これは二月堂のお水取り風景です。お水取りの法行が始まる前に、東大寺の管主から法話があり、聖武天皇の時代から1260年間、一年も欠かさず続けられて来たことや、お水取りの法行についてご説明があります。1260年間、一年も欠かさずとは！また、今年には東日本大震災の被災者に黙祷も捧げました。三月一日から毎夜、午後七時から、直径一メートル、重さ七十五キロの十本の巨大な籠松明が練行衆によって、次々に下の回廊から上の本堂舞台廊に担ぎ上げられ、燃えさかる火焰を大観衆の頭上でごろんごろんと振りかざして回しながら回廊を駆け回ります。壮絶な火の祭典です。クライマックスに達する最終日の十二日目の夜は午後七時三〇分から、十三本の籠松明が駆け上がります。最終日には三万人以上の観衆が詰めかけます。このため、早めに会場に入らないと居場所がありません。

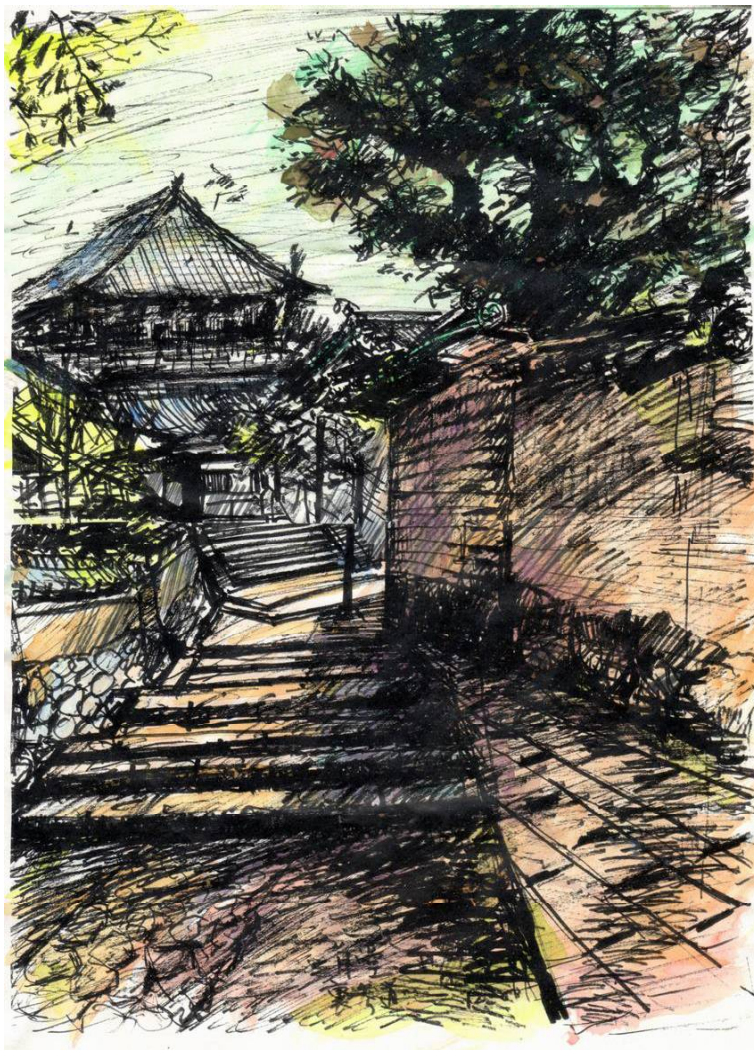
絵描きの人気スポット、 二月堂裏参道



東大寺は大仏殿あたりだけ拝観してお帰りになる人もありますが、もったいない気がします。私は、東の二月堂のあたりが特に好きです。大湯屋の方へ下りていく二月堂裏参道は絵描きにはたまらないポイントです。角を曲がることに、大和路を代表するような風景が現れます。折れ曲がって続く長い石段の両側に古い瓦の土塀が連なりあい、春にはもくれん、夏には木の緑、秋には紅葉や柿の実が彩りを添えます。少年時代に修学旅行で受けた大仏殿かいわいの印象とは全く違った静かな感動を覚えるのは、自分が大人になって、少年時代とはちがった視点で物事を見るようになったせいでしょうか。

二月堂の伝説

東大寺はこの地にあった金鐘寺が聖武天皇の命で国分寺昇格しました。当時の世相は藤原氏による権力闘争、天然痘の流行、飢餓や朝廷への反乱で人心は荒廃。政治の中枢にあった藤原四兄弟も天然痘で相次いで亡くなり、藤原の権力闘争で亡くなった長屋王の崇りと恐れられました。このような時代に東大寺の建立に力を尽くしたのが近江の志賀に生まれた（実は帰化人という説もある）良弁（ろうべん）上人です。二月堂の前に良弁杉（ろうべんすぎ）があります。老弁上人が二歳の時に鷲にさらわれ、杉の巨木の上に置き去りにされたといい、良弁はその大杉を父母と思い毎日参拝を怠らなかつたそうです。良弁の母は三〇年間も我が子を探し続け、この杉の下で良弁と再会できたと伝え、人形浄瑠璃や歌舞伎の「二月堂」はこの伝説を脚色したものです。現在の老弁杉は枯死した老弁大杉の枝を再生させた若木だそうです。



絵ごころをそそる二月堂裏参道

二月堂の参道では、日曜日ともなると絵描きさんがいっぱい絵を描いています。絵ごころを強く刺激する景観に惹かれてのことです。風景を絵にする場合、描く物が多く存在すると取捨選択ができて良い絵になる条件が高まります。参道には多くの興味深いものがあります。単身赴任の会社員の方が、絵を描いていらつしやる間に奥様が奈良市内を自由に散策なんていう人や、近くの高畑町あたりの絵描きさん、絵画教室の先生とお弟子さんみたいな集団が来て描いておられることもあります。描いている人に多くの人が声をかけたり覗いたりしていかれます。

